

◎ローマ法王庁：同性愛者にも配慮を 教会に促す文書

【毎日新聞, 2014年6月28日】

<http://mainichi.jp/select/news/20140629k0000m030025000c.html>

キリスト教カトリックの総本山にあたるバチカン（ローマ法王庁）は26日、同性愛者のカップルにも配慮するようカトリック教会に促す文書を発表した。同性婚を法律的に認める国が増えている現状を踏まえ、同性愛者を排除しない姿勢を示したと言える。

この文書は、今年10月5～19日に「家族」をテーマにバチカンで開かれる世界代表司教会議（シノドス）のたたき台となる。世界各国のカトリック教会へのアンケートの回答を受けて作成された。

文書は同性婚について、「男女による結婚の再定義には反対」としながらも「過激な対応」を戒めている。さらに、同性婚が認められている国では「多くの信徒が同性婚者に対して偏った態度を取るべきではないと考えている」と記している。

その上で、同性愛者のカップルが養子を取ることに反対を唱えつつ、ほぼすべての回答が「同性愛者カップルが子どもの洗礼を求めた場合には、他の子どもと同様の配慮を受けるべきだ」と主張していると指摘した。

フランシスコ・ローマ法王は、同性婚を認めないカトリックの教義を維持しつつ、同性愛者差別に反対する立場を取っている。法王は昨年7月、「神を探し求めている同性愛者を裁くとしたら、私はいったい何者なのか」と述べ、同性愛者に一定の理解を示した。

☆関連するキーワード：同性婚、家族観

## 一神教における戦争と平和（2）

### —— 暴力とディスコース ——



### Overview

- ディスコースとリアルポリテイク
- イスラモフォビアが映し出すもの
- 一神教をめぐるディスコース——日本社会を事例として
- オリエンタリズム、オキシデンタリズム
- 見えざる偶像崇拜
- 構造的暴力
- まとめ

### ディスコースとリアルポリテイク

- 敵対的ディスコース（言説）の蔓延は、好戦的・暴力的なリアルポリテイクへとつながる。例：反ユダヤ主義とホロコースト
- 危機的な対立を回避するためには、敵対的ディスコースを抑制する必要がある。
- 敵対的あるいは相互無関心な関係を変化させるために、仲介者が重要な役割を果たす場合がある。

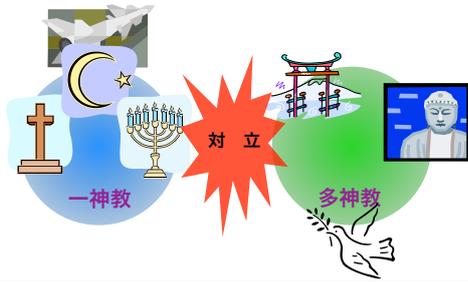
### イスラモフォビアが映し出すもの

- イスラモフォビア（islamophobia、イスラーム嫌悪感情）
- ゼノフォビア（xenophobia、外国人嫌い）の一種
- 9.11以降、欧米を中心に広まる。日本では、顕著なイスラモフォビアは（今のところ）見られない。
- 欧米における1960年代以降のムスリム移民の増加も関係。
- ポスト冷戦時代におけるイスラーム脅威論（共産主義に代わる外敵としてのイスラーム）→ステレオタイプなイスラーム理解の増殖

### 一神教をめぐるディスコース —— 日本社会を事例として ——

- 一神教（特にキリスト教）に対する恐怖と憧れ
- 虚像と実像の混在
- 近代日本における天皇制と国家神道の「一神教」的機能
- 異質なものに対する対応の歴史（16世紀以降）の中で
- 禁制以降、「切支丹」のイメージが貧困化し、虚像が増殖していく。
- 【参考】大橋幸泰『ひそひそ潜伏キリシタン——江戸時代の禁教政策と民衆』講談社、2014年。

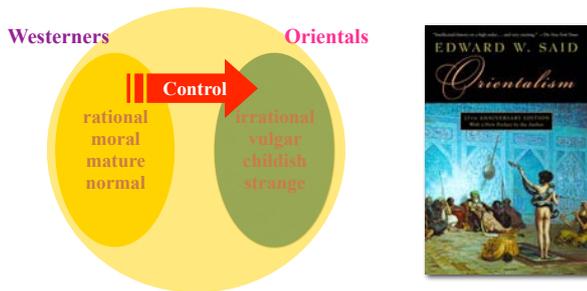
## 一神教と多神教のイメージ



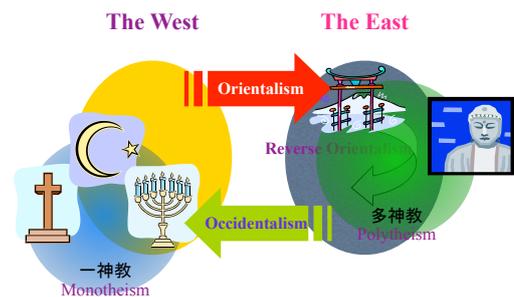
## 一神教と多神教をめぐるディスコース

1. ユダヤ教・キリスト教・イスラームは唯一の神を信じる宗教であるから、対立・衝突を避けることができない。
2. 戦争や自然破壊など、現代世界の問題は一神教（文明）に帰するところが多く、日本の多神教（文明）こそが一神教的思考の限界を乗り越え、問題解決に貢献すべきである。
3. 一神教は排他的・独善的・好戦的・自然破壊的であるのに対し、多神教は寛容・協調的・友好的・自然と共生的である。

## オリエンタリズム (Orientalism)

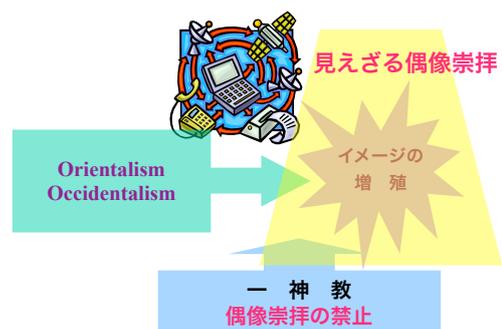


## オクシデンタリズム、リバース・オリエンタリズム



## 補助線としての「見えざる偶像崇拜」

- ヘブライ語聖書は、異教の神々への礼拝をアヴォダー・ザーラー (Avodah Zarah) と呼び、目に見える偶像 (pesel) に限定していない。
- 偶像：支配の象徴 (例：古代世界における王)、人間の欲求 (欲望) の投影と増殖。
- 金・銀・石などで刻まれた偶像が担っていた象徴的力は「見えざる偶像」へと容易に転化される。



## リアルポリティークにおける偶像崇拜

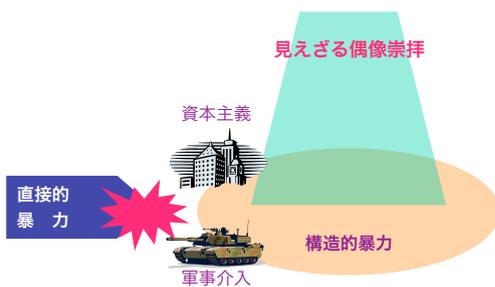
- 現代世界においては、すべての出来事が視覚的なイメージに変換される。
- ソーシャル・メディアがイメージ（偶像）の増殖を加速させる。
- 作られた「偶像」は真実をあらわすより、むしろそれを隠す。



## 議論の前提としての構造的暴力

- 「ある人に対して影響力が行使された結果、その人が現実に肉体的、精神的に実現し得たものが、その人のもつ潜在的実現可能性を下回った場合、そこには暴力が存在する」(J. ガルトゥング『構造的暴力と平和』5頁)。
- このような暴力を「**構造的暴力**」と呼び、それに対応する平和を「**積極的平和**」と呼ぶ。
- 構造的暴力の例：独裁国家、絶対的な貧困状態、差別社会

## 構造的暴力と直接的暴力



## 現代における偶像破壊 (iconoclasm)

- **バーミヤンの仏像破壊 (2001年3月12日)**  
- 見える「偶像」として
- **The World Trade Center (2001年9月11日)**  
- 資本主義の富と暴力を体現した「偶像」として
- **The Pentagon**  
- 軍力を体現した「偶像」として

絶望と歓喜を引き起こす



## まとめ

- 日本における一神教と多神教をめぐるディスコースは、**オキシデンタリズム**と**リバース・オリエンタリズム**の複合体(→見えざる偶像崇拜)として、特定のイメージを拡散させ、**構造的暴力**となる危険性をもっている。
- このディスコースの構造は、普遍的に見出すことができる。
- 軍事的攻撃(**直接的暴力**)により「悪」を根絶することを目指すよりも、**構造的暴力**(→見えざる偶像崇拜)を認識し、それを抑制していかなければならない。
- 【参考】小原克博『宗教のポリティクス』第4章。